

基礎原案での記載箇所		章項目	5.2.8	ページ	p.39	行	34行目
事業名	生物に配慮した護岸工法の採用		河川名	事例河川			
府 県	市町村		地先				

現状の課題
 河川工事の施工、土砂の仮置き、工事用道路の設置やそれらの工事に伴う濁水の発生等が生物の生息・生育環境に影響を与えている。

河川整備の方針
 護岸工事等の実施にあたっては、縦断方向及び横断方向の河川形状、湖と河川や陸域との接続形状がなだらかに連続するように施工するが、水衝部等で河岸の保持のため護岸を施工する場合は、生物の生息・生育環境に配慮した工法を採用する。

位置図

(全川的に実施)

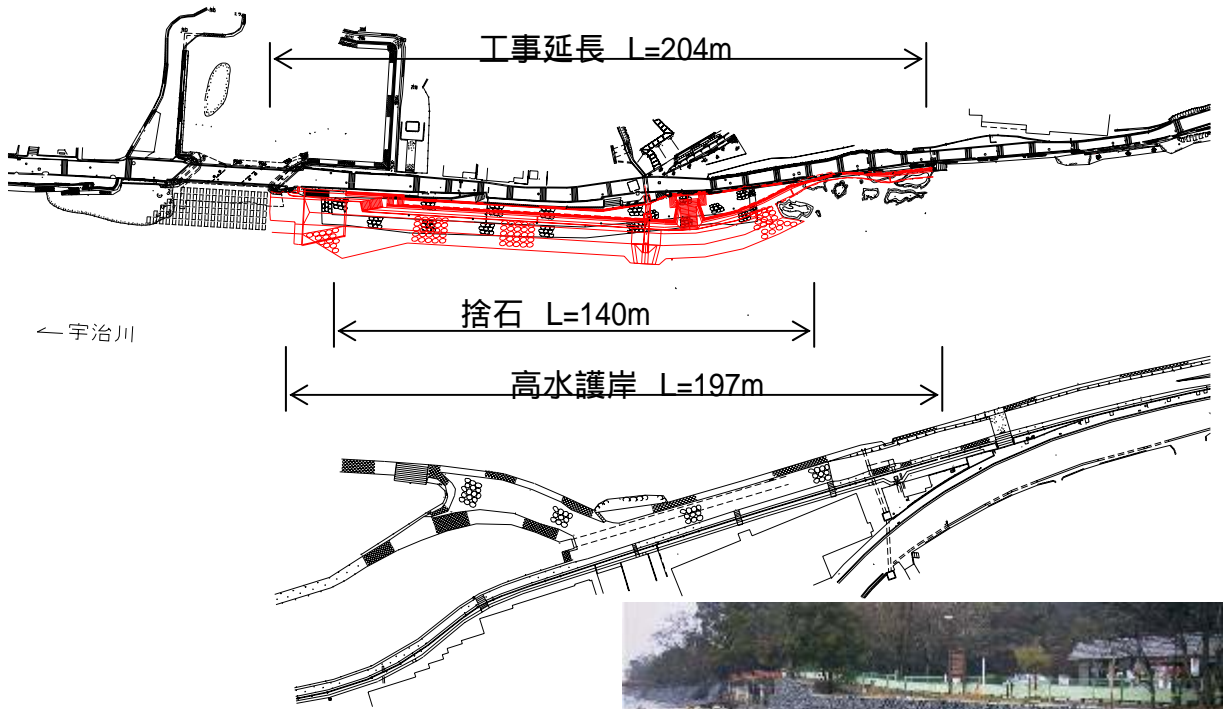
具体的な整備内容(事例)
 ・生物に配慮した護岸工法の採用する。

スケジュール

== 実施

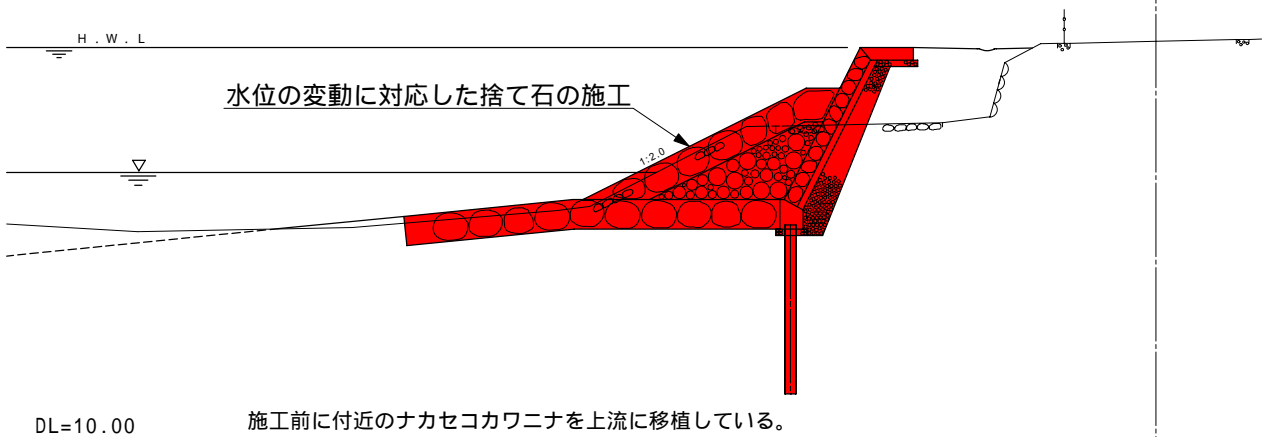
H15	H17	H19	H21	H23	H25

平面図(事例)



横断面図(事例)

標準断面図



■ . . . 施工箇所

整備効果

事業箇所付近に生息している絶滅危惧種のナカセコカワニナは水深が浅い所でかつ多孔質な箇所でしか生息できない。護岸前面の緩傾斜捨石により多様な水位変動に対応し、多孔質な環境となったため、ナカセコカワニナにとってより良い環境となった。

捨石を高く、緩傾斜で積み上げたことで親水性が増した。

提案理由(代替案含む)

絶滅危惧種であるナカセコカワニナは琵琶湖・淀川固有の種であり、現在では主要な生息場所が宇治市内の一部に限られている。事業箇所についても、事前調査の結果、存在が確認されたため、最大限の配慮をすることとなった。

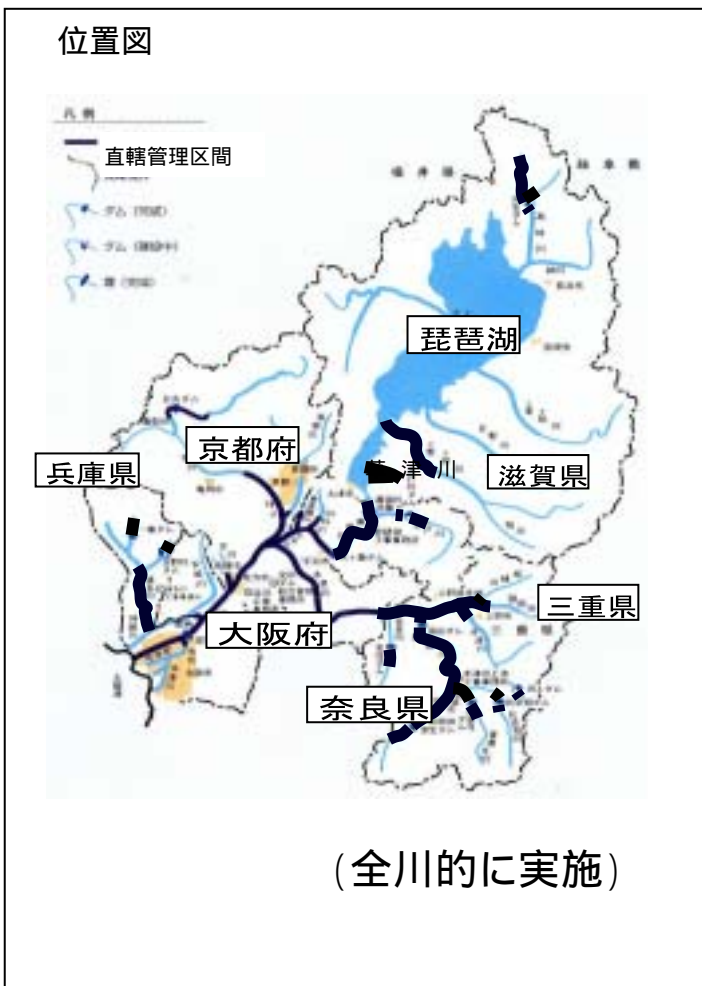
ナカセコカワニナ(体調約20mm)



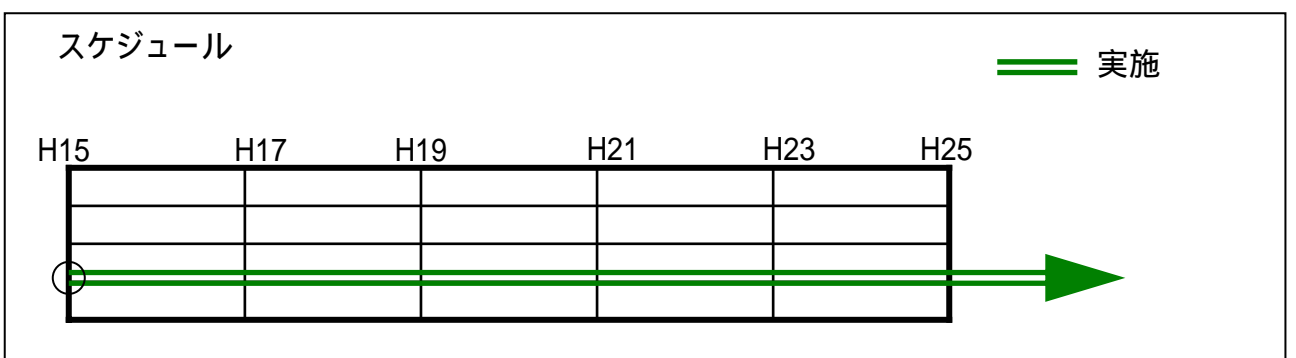
基礎原案での記載箇所		章項目	5.2.8	ページ	p.39	行	35行目
事業名	植物の結実時期を考慮した施行		河川名	事例河川			
府 県	市町村		地先				

現状の課題
 河川工事の施工、土砂の仮置き、工事用道路の設置やそれらの工事に伴う濁水の発生等が生物の生息・生育環境に影響を与えている。

河川整備の方針
 仮締切、工事用道路等の仮設工作物及び施行機械、施工時期等については、できるだけ生物の生息・生育環境への影響を少なくするようにする。



具体的な整備内容(事例)
 ・植物の結実期等に配慮する。



工程表(事例)

木津川除草作業工程表

区 分	5月	6月	7月	8月
一 般 部				
オニユリ群生地				

状況(事例)



整備効果

オニユリの群生地のみ維持作業の時期をずらすことで、群生しているオニユリの植生が保たれた。

提案理由(代替案含む)

群生しているオニユリは大変珍しく、京都府では貴重な植物ランキングに挙げられている程である。よって、河川内での維持作業や工事をする際には最大限、留意する必要があった。

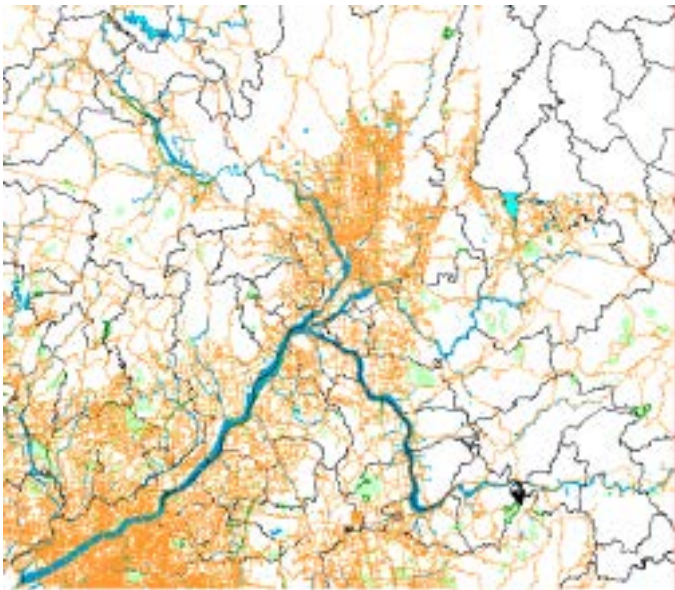
オニユリは花を咲かせると種を落とし、次の年も咲くため、群生している状態が保たれる。しかし、維持作業の時期とオニユリが花を咲かせる時期が同じであったため、そのまま維持作業を行ってしまうとオニユリまで刈ってしまい、結果、オニユリはムカゴ(種)を落とせずに繁殖できなくなります。かといって、維持作業は河川管理上重要な作業であり、欠かすことは出来ない。よって、維持作業の時期をずらして行うことにより、植生を保ちながら良好な河川環境を維持していくことを検討した。

基礎原案での記載箇所		章項目	5.2.8	ページ	p.39	行	37行目
事業名	現況の植生を考慮した必要最小限の工事用道路の設置		河川名	事例河川			
府 県		市町村		地先			

現状の課題
 河川工事の施工、土砂の仮置き、工事用道路の設置やそれらの工事に伴う濁水の発生等が生物の生息・生育環境への影響を与えている。

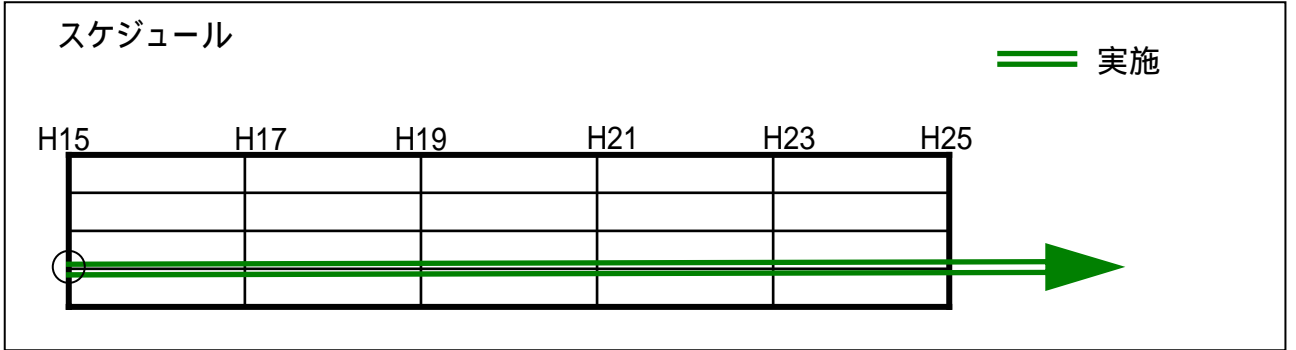
河川整備の方針
 仮締切、工事用道路等の仮設工作物及び施工機械、施工時期等については、できるだけ生物の生息・生育環境への影響を少なくするようにする。

位置図



(全川的に実施)

具体的な整備内容
 現況の植生を考慮して必要最小限の道路幅、ルートとなる工事用道路を設置する。



実施例の平面図



鶺殿地区の環境への影響を少なくするように、地形・植生状況を考慮して、工事用道路のルートや道路構造を選定した。

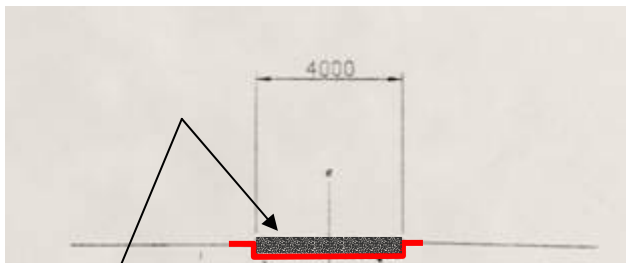
施工場所

採用ルート

比較ルート

既設工事用道路

実施例の横断図



流用砕石
($t = 450$)

土木シート
($W = 6000$
 0)

鶺殿に存在しない種子が工事用道路造成に伴い搬入する土砂・採石などに混入しており、外来種を持ち込む危険性があることから、工事終了後、持ち込んだ土砂等を完全撤去できるように、土木シート施設を設置した。



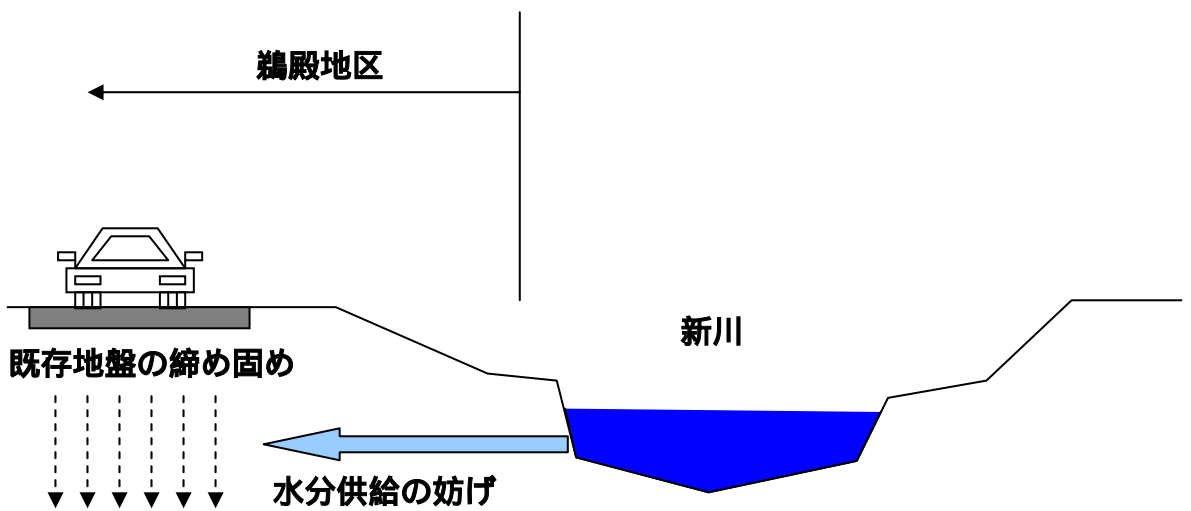
整備効果

現況の植生を考慮した必要最小限の道路幅、ルート、構造の工事用道路の設置

提案理由

	特徴	評価
採用 ルート	<p>過去に工事用道路の造成及び植生の踏みつけを行っていることから、植生の新たな分断を最小限に抑えることができる。</p> <p>さらに、水辺の希少種であるミコシガヤ、ミゾコウジュが確認されているが、攪乱により維持されるという生態特性を持つことから、工事用道路による消失は一時的なもので、早期の回復が期待できる。</p>	
比較 ルート	<p>クズ、セイタカアワダチソウといった乾性植物が多く生育することから、工事用道路によるヨシ群落の消失を最小限に抑えることができる。</p> <p>しかし、工事用道路造成により新たに既存地盤の締め固めによって新川から鶺殿地区側への水分供給を妨げる危険性がある。(下図参照)</p> <p>また、今回施工しなければ乱されることのない地区である。</p>	

比較ルートを採用しない理由の説明図

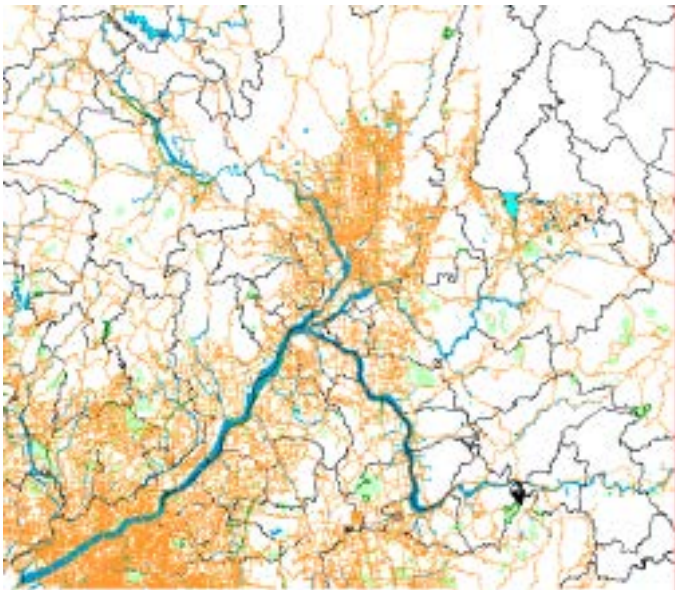


基礎原案での記載箇所		章項目	5.2.8	ページ	p.40	行	1行目
事業名	工事中濁水の生物水域への流入防止		河川名	事例河川			
府 県		市町村		地先			

現状の課題
 河川工事の施工、土砂の仮置き、工事用道路の設置やそれらの工事に伴う濁水の発生等が生物の生息・生育環境への影響を与えている。

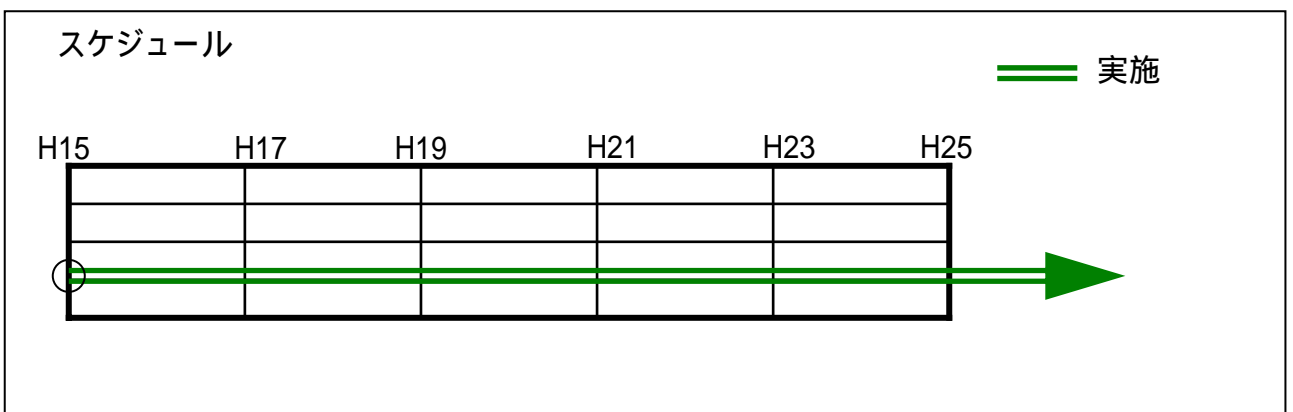
河川整備の方針
 工事により発生する濁水は、できるだけ生物の生息・生育条件に影響を与えないよう排水ルート等に配慮する。

位置図



(全川的に実施)

具体的な整備内容
 工事中の濁水については、生物の生息・生育に影響を与えないよう、濁水防止等の措置を実施する。



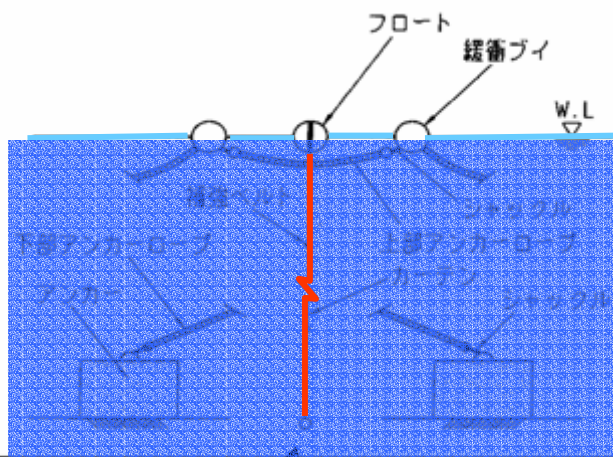
実施例の現況写真

シルトフェンス
(工事濁水の流出防止)

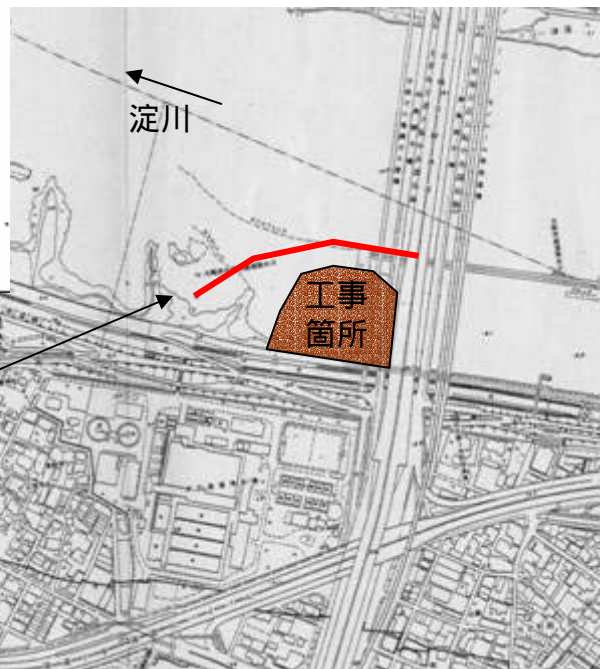


実施例

工事濁水が工事区域外に流出しないようシルトフェンス(カーテン)を実施



シルトフェンス



整備効果

工事中の濁水を工事区域外へと流出することを防止することができる。

提案理由

濁水を防止するため、施工性、経済性と効果から比較

	採用案(シルトフェンス)	鋼矢板締め切り案
施工性	短期間での設置が可能	× 矢板打設に相当の期間が必要
経済性	施工手間、リース料ともに安価	× 施工手間、リース料ともに高価
効果	濁水防止が可能	施工箇所と水域とを完全に分離可能
総合評価		×